

じゃがいも 二本松市立油井幼稚園

本年度は、園舎増築にともなって、栽培園もなくなり栽培活動をどのように進めようかと考えていたが、栽培活動が年間の保育活動の中で果たす役割は大きなものがあり、なくすわけにはいかなかった。

そこで、なくなったものは作るしかないと考え、保護者の力も借りながら、自分たちで作ることにした。さらに、じゃがいも栽培についても、野菜の栽培に詳しい幼児のおばあさん2名と、都合のつく保護者の方々の協力も得られることとなった。

前年度の「じゃがいも」とのかかわり。

4月にじゃがいも植えをするが、特に教育目標の具現や科学する心を育てることとの関わりは考えずに、単純に栽培活動のひとつ、また収穫してカレーパーティーをするための活動として行う。

じゃがいもの生長や花、虫等には特に気付かせることが少なく、植えた後、収穫までは、個々の対応だけに終わってしまっていた。

高齢者や保護者とともに収穫をし、その喜びを味わう。

カレーパーティーをして、収穫や調理の楽しみを味わうとともに、高齢者や保護者との交流を楽しむ。

指導計画の作成でねらったこと。

じゃがいもの栽培活動の意義について整理し、縦に「ねらい」「予想される幼児の姿」「育てたい姿」「環境構成・具体的な援助」の項目、横に「4月～5月」「5月～7月」「9月」の項目をとり、**意図的な保育活動を展開**できるようにした。

実際の活動は幼児の興味関心によって意図したものとは違った方向に向いても、具体的な指導計画を作成したことによって、適切に援助ができるようになって考えた。

じゃがいもの生長や、自然（太陽、気温、雨等）とのかかわり、ちょうやテントウムシなどの虫とのかかわり、人とのかかわりを通じて「驚き」や「感動」「考える」等の体験を意図的に構成する。

【環境の整備について】

園舎の増築に伴い、畑がなくなるなど環境も大きく変わった。厳しい財政事情の中でそういった環境の整備の予算はなく栽培活動もできなくなるかと心配したが、昨年からの啓発活動を続けていた結果、保護者の理解が得られ、奉仕作業という形で自分たちで整備して下さることとなった。

園舎の増築が終わっても更地であったが、子ども達のために、畑や池、花壇などを造っていくこととなった。はじめに、種芋の植時の早い、じゃがいもの畑を造っていただいた。

次に、サツマイモの畑、そして観賞用ではなく、子ども達が花摘みをしたり自由に入ってよい花壇、メダカ池を造っていただいた。



実践 「じゃがいも いっぱいだねー」 4歳児・5歳児 4月～7月

園舎の増築により、昨年度まで使用していた栽培園がなくなったが、工事業者にお願いして、工事に伴う残土を残しておいていただき、小学校から堆肥をいただき何とか畑らしくなってきた。

4/19 「これ なあに？」

朝、今日植える種いもを出しておく。

A男 「これ なあに？」

A子 「今日 おいも植えるんだね」

- ・ じゃがいもに対する興味関心は様々である。友だちが「おいも」と言っても関心が薄い子が男児に多い。
- ・ 女兒は、昨年度の活動を思い出し、楽しみにする。

幼児の祖母2名が、畝作り及び種いもの植え方を教えてくださる。

- ・ 一人2個ずつの種いもを植える。
- ・ 水くれはせずに、雨のみでよいことを聞く。

保育者の援助：「いつ芽が出るんだろうね」と声をかけ、楽しみに待てるようにする。

4/20 「じゃがいもさん お水飲めたね」

子ども達は、咲き始めた桜への興味関心が強く、昨日植えたじゃがいもを見に行く幼児はいない。

保育者の援助：「じゃがいもどうなったかなあ」と子ども達のそばでつぶやく。

- ・ ハッとしたりのようにテラスに出て畑を見る。

B男 「なんでもないよ」

しばらくすると、雨が降ってきた。

B子 「じゃがいもさん お水飲めたね」

分析：芽が出るまでの間は、子ども達の関心も薄れがちであった。芽が出た時の感動を味わわせるためには継続的な働きかけが必要であった。

5/6 「つちが われたよー」

畑を見に行ったC子が芽を出した様子を見た。

C子 「つちが われたよー」

分析：硬かった土を割るようにして出てきたじゃがいもの芽をみた感動が伝わるC子の声であった。

5/6～7/13 じゃがいもの生長とちょう・テントウムシ・じゃがいもの実

芽が出た後は、毎日の変化がおもしろくそして楽しくなり子ども達は声をかけなくても毎日畑を見に行くようになった。

- ・ 毎日の変化がおもしろくなった。
- ・ 茎の成長が思ったより早く、不思議がっている。
- ・ 花が咲き始め、思わぬ美しさに感動している。
- ・ ちょうがやってくるようになり、じゃがいもが昆虫の役に立っていることに気付く。
- ・ テントウムシが見られかわいいと喜ぶが、葉に次々と穴が空いていくことに気付く。
- ・ 絵本や図鑑でじゃがいもと昆虫の関係に驚く。
- ・ ちょうやテントウムシを追いかけ畑を荒らしてしまう。
- ・ 葉が枯れ始めたものもあり、じゃがいもができるか心配する。



7/13 「じゃがいも いっぱいだねー」

種いも植えを手伝っていただいた祖母2名とお母さん達の協力をいただきながら、じゃがいもの収穫作業を行う。

- ・ 収穫の仕方を教えていただく。
- ・ 自分で茎の根本を持ち引き抜こうと頑張る。
- ・ 子ども達は大喜びで収穫をする。
- ・ 収穫したジャガイモをまとめるとその多さに驚いていた。

D男 「じゃがいも いっぱいだねー」

収穫の喜びを更に味わわせるために、早速ふかしてみんなで食べる。

D子 「うわー、おいしい」



<考察>

昨年度の活動を振り返り指導計画を作成した結果、多様な幼児の活動、気付きに応じた環境構成と支援を進めるために大変効果があった。ともすると、興味関心が持続しない幼児であるが意図的な支援により、変化のない時期を乗り切り、芽が出た後は、その変化の速さから、子ども達は積極的にじゃがいもと関わっていくようになった。

また、今年度は、環境の整備も計画していたが、保護者の協力を得て環境が整備され、子ども達もじゃがいも畑の周辺の変化に興味をそそられ、関心が高まったようである。

みどころ

栽培活動を進めるための恵まれた環境や整った環境で保育をすることは、望ましいことです。しかし、多くの場合はこの園のように、環境を見直し、工夫を図って整備をすることで、子どもたちに応じた環境をつくり、保育を展開しています。保護者の理解や協力は、環境を整備する上でも、大きな力になっていることが分かります。

実際の栽培活動では、保育者が子どもたちの様子を把握して援助をすることで、子どもたちはじゃがいもに気持ちを向け、じゃがいもの生長に大きく心を動かすことができました。子どもたちの収穫での充実感や喜びの様子から、今後もさらに「科学する心」が育まれていくことを期待できます。